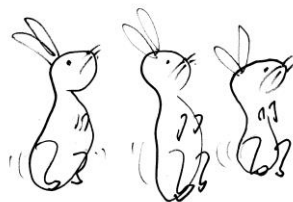


藤田浩子の 少し昔のこと 〈93〉

兎の昔話

兎の顔をじいーっと見たことありますか？兎はなにか食べているわけでもないのに、いつも口をもぐもぐさせている、それはなぜかという話を紹介します。

「むかしまずあったと。兎はなあ 今でも本当は語れるんだぞん したが兎は決して語らねえ。なあしてかっていうとな むがあし まだ兎がペラペラしゃべってたころの話なんだけんどな 一匹のたいそうはねくら（かけっこ）の速い 自慢ばありしている兎が仲間を集めて語っていたんだと」ここからは要約ですが、その兎が自分は狼より早いから狼をからかってやったぞと自慢しているとき、ひたひたとかすかな音がある、仲間の兎が「なにか聞こえる」と耳を立て「危険な匂いがする」と鼻をひくひくさせて警戒し、みな逃げてしまったのに、しゃべっている兎は



しゃべるのに夢中で気づくのが遅れオオカミに食われてしまった。それ以来兎はしゃべるとろくなことがねえからと、しゃべらなくなり、ひたすら聞き耳を立てる、だから耳が長くなってしまった、という由来話です。

昔話としてはそこでおしまいなのですが、道徳教育の好きな大人が「愚かな女ほどしゃべりたがる、黙って他人（ひと）の話を聞いている女は賢い」とか「沈黙は金、雄弁は銀」などと付け加えたものですから、おしゃべりな女は嫌われることになりました。

私のように年中あることないことしゃべっているような女は、一番嫌われるのでしょね。でも、黙ってられないときもあります。エライ人たちが勝手に閣議決定とやらで、「守る国」から「戦う国」にしよう、と軍事予算をやたら増やすし、やめようと決めた原発もまた動かそうとしています。事後処理の方法も解決していないのに、海に垂れ流しながら稼働させようというのです。黙ってはられません。

リレー連載 <226>

わたしの大好きな絵本

根本真佐子（高田小学校ブックボランティア）

出会いは、我が子が通っていた幼稚園の発表会だった。年長さんたちの気持ちのこもった演技に惹き込まれ、最後には涙まで浮かべてしまった。

その後本屋で購入するのだが、その絵に驚いた。この物語はハロウィンの日に現れた後にプペルと名付けられるゴミを集めてできた体のゴミ人間が登場する。夜のシーンが全てのためベースは黒色だからまず珍しい。さらに細部まで描き込まれた絵は浮かび上がるような光の映像のようで魅入ってしまう。言葉のリズムも楽しく、声に出して読んでみると楽しい。冒頭の部分はゴミ人間が出来上がるまでの説明で少し長いですが、五七調のリズムは読みやすくイメージがわきやすい。

『えんとつ町のプペル』

にしのみきひろ 幻冬舎

プペルは臭い汚いと周囲から嫌われていくが、唯一差別することなく接するルビッチという少年と友達になる。二人の友情は続くのか？ルビッチの亡父の言葉「信じぬくんだ。たとえひとりになっても。」とは？

仮装イベントが取り沙汰される日本で、ハロウィンの原点に触れる、画力とストーリーともに読み応え充分のこの絵本。

作者はお笑い芸人の顔を持つが、その才能にも驚き。

我が家で読み聞かせると必ず最後は親子で涙ぐんでしまう…。余韻を静かに味わえる大好きな絵本である。

